九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

賢治文学におけるユートピアの生成 ： 「『旅人のはなし』から」、「双子の星」を中心に

黄, 英
海洋大学外国語学院

https://doi.org/10.15017/16041

出版情報：Comparatio. 9, pp.15-22, 2005-07-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

賢治文学におけるユートピアの生成

――『旅人のはなし』から」、「双子の星」を中心に――

黄　英

周知のとおり、宮沢賢治文学には、ユートピア志向が絶えず存在している。本稿は、習作の『旅人のはなし』から」と初期代表作の「双子の星」を取り上げ、そのユートピア志向の生成段階の特徴を明らかにすることを目的としている。

一、『旅人のはなし』から」に遡って

賢治文学におけるユートピアの生成は短篇『旅人のはなし』から」にさかのぼることができる。このテキストは大正六（一九一七）年七月に盛岡高等農林学校在学中の同人雑誌「アザリア」第一号に発表したものであり、以前読んだある旅人の話を語るという説話形式を採っている。旅人が、たくさんのことを経験しながら長い旅を続け、ついに、王様の立派な城に行き、自分が王様の王子だったことを知るが、離れてしまったたくさんの友達のためにまた旅に出る、というのが梗概である。

このテキストには、旅人のさまざまな見聞や旅人自らの数奇な体験が記されているが、各々の話に必ずしも何らかの連関があるわけではない。むしろ続橋達雄[1]が「よく熟さない想念や思想的萌芽が、不統一のまま盛り込まれている」と指摘したように、それぞれの話がばらばらに組み立てられている。ゆえに、そこから統一的なテーマを見つけることはほとんど不可能に近い。が、このテキストに、後の賢治文学に開花する多くの可能性が秘められていることは確かである。そこで、本稿では、このテキストから、その可能性の一つであるユートピア志向の起源を探ってみることにする。

筆者は次の一節に注目したい。

あるときは一つの御城に参りました、その御城の立派なことは何にたとへませう。道ばたに咲いてゐるクローバアの小さな一つの蝶形花冠よりもまた美しいのでした。（中略）その国の広い事、人民の富んでゐる事、この国には生存競争などと申す様なつまらない競争もなく労働者対資本家などといふ様な頭の病める問題もなく総てが楽しみ総てが悦び総てが真であり善である国でありました、決して喜びながら心の底で悲しむ変な人も居ませんでした。

この一節は、旅人の父である王様の国のことを述べたくだりである。この部分は賢治が終生信仰した法華経の信解品における有名な〈長者窮子〉[2]の比喩から題材を採ったことは明白である。文中の傍点は賢治が自ら施したもので、そこから、傍点のある部分――この国の象徴とも言える御城の美しい外観に対する描写――へのこだわりが読み取れる。この美しい御城が、「道ばたに咲いてゐるクローバアの小さな一つの蝶形花冠よりもまた美しい」という表現は、そこが神秘的な甘い匂いを漂わせている場所であるように感じさせる。

さらに、その国のあり方も語られている。まず挙げられたのは、土地の広いことと「人民の富んで」いることである。二つとも物質的な要素であるが、注目したいのは「人民」という言葉の使用である。一般の国語辞典での定義は、①国家・社会を構成する人、国民。②平等な権利を持ち、国家などの強権に対抗する主体としての人、「～裁判・～投票」、などとなっている。二つの意味が挙げられているが、このテキストでの意味を確定す

る前に、まず、賢治の他のテキストにおける「人民」という言葉の用例を見てみよう。

賢治の童話テキストのなかで、「人民」が出てくるのは以下の四つのテキストである。

①「四又の百合」

「申し上げます。町はもうすっかり掃除ができてございます。人民（傍線は筆者。以下同じ）どもはもう大悦びでお布令を待たずきれいに掃除をいたしました。」

②「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」

「いいや、よろしい。やります。しかし裁判の方針はどうですか。」

「はい、裁判の方針はこちらの世界の人民が向うの世界になるべく顔を出さぬように

致したいのでございます。」

③「学者アラムハラドの見た着物」

そしておしまいとうとう国の宝の白い象をもお与えなされたのだ。けらいや人民ははじめは堪えていたけれどもついには国も亡びそうになったので大王を山へ追い申したのだ。

④「三人兄弟の医者と北守将軍」（詩形式作品）

「わたしも北の国境で

三十年というものは

ずいぶん兵隊や人民の

衛生や外科にはつくしました。」

以上の用例を見てみると、いずれも意味①に当てはまるのではないかと思われる。つまり、「人民」は単なる人間を指すのではなく、国家、社会を構成する、人と人の間のさまざまな関係のなかで存在する人間を指すのである。つまり、国家や社会といった要素が強く反映されているだけでなく、国家、社会的な要素なしにはこの言葉は成立し得ないと言ってもよいであろう。

「『旅人のはなし』から」というテキストでも、「人民」がこのようなニュアンスを持った意味合いで使われていると言える。もちろん、テキストに出てくるのは或る王国のことであるため、この国の人を指す場合は「人民」という言葉を使うのが当然といえば当然であるが、「人民」という言葉を使う限りは、それが国の立場からの、少なくとも国や社会などのニュアンスが含まれていることを意識しての発言であることは無視できない事実である。なお、その国を治めるのは旅人の父である王様であるということもはっきり書かれている。従って、ここに描かれた理想の世界は単なる人々の集まりではなく、王権の統治下に置かれていると言える。もちろん、その王権は善の化身であり、実際の政治とは遠くかけ離れていることは明白である。

また、そこには生存競争も労資抗争などの問題も存在しない。注意すべきは、これを述べるのに、否定形「なく」を連用していることである。二つの否定形式によって、生存競争も労資抗争も好ましくないものとされている。具体的な問題を取り上げ、否定するということは、これらの問題は旅人がこの国以外のどこかで経験し、また煩わされた現実問題であるということを示唆している。なお、この理想の国では、この二つの現実問題が解決されたとも、最初からなかったとも推測できる。このように否定形で事柄を取り上げていることから、旅人が自らの外部の尺度でもってこの理想の国を評価していることがわかる。

では、この国の好ましい状態はどのようなものだったろう。続きの文を見てみよう。そこでは「総てが楽しみ総てが悦び総てが真であり善」である、と書かれている。これはまさに至福の状態とも言える。「楽しみ」、「悦び」は人間の精神的な状態を表すものであり、「真」、「善」は物事の状態を表すとともに、人格など、人間の精神的なものにも緊密にかかわっているのである。したがって、続きのくだり――「決して喜びながら心の底で悲しむ変な人も居ませんでした」――にあるように、詰まるところ、すべては「心の底」がどうであるかにかかわっている。いわば、ここで言う至福の理想状態は、結局、人間の心の問題に収斂している。もちろん土地の広さや、人民の富裕さなどのような物質的な要素も挙げられており、考慮すべきことではあるが、中心的な問題ではないことは明白であろう。

以上見てきたように、『旅人のはなし』から」に描かれた理想世界では、土地の広さや人民の裕福さだけでなく、人々が心から本当に喜んでいるかどうかといった、精神的な幸福が重視されている。また、善の権化である王権の存在も無視できない。これは後のテキストに表れる絶対的権威の存在とつながっている。さらに、旅人の見聞、体験談というテキストのスタイルからも分かるように、その理想の国は現地点から遠く離れた向こう側にあるのである。が、一方、旅人が理想の国を眺める視線は現実と緊密に繋がっているため、理想の国は現実世界とは完全に切り離されているわけではなく、むしろ心理的には背中合わせの関係にあるといっても過言ではないだろう。空間的に遠く離れた理想の国に、現実世界で実現できない夢が託され、理想の国は現実世界の人々のあらゆる願望の集合体ともなっていると言えよう。

二、天上の楽園「双子の星」

「双子の星」は大正七（一九一八）年の夏に家族に読み聞かせたと伝えられる賢治の初期童話テキストの一つである。天上にある水晶のお宮に住む双子の童子チュンセとポウセの話であるが、粗筋は以下の通りである。

二人の役目は毎夕星めぐりの歌に合わせて銀笛を吹くことである。彼らはしばしばいざこざに巻き込まれる。ある日、二人は、大烏と蠍が無意味な喧嘩で私闘を起こし、ともに傷つき倒れたのを目撃し、その両者を献身的に世話したため、仕事の時間に遅れそうになった。その時、王様の使者稲妻が連れ帰ることによって、二人は無事に役目を果たす。また、ある晩、箒星が二人を騙して連れ出し、海へ落とす。海底で二人はいじめに遭うが、海蛇に助けられ、海の王様の所へ連れて行かれる。その王様の好意で、二人は天上に帰ることができた。

このテキストについての研究は多岐にわたり、数多くなされているが、処女作としての考察や言及が多い。例えば、賢治童話の創作動機に関連して触れるもの[iii]もあれば、後期テキストへの影響、特に「銀河鉄道の夜」との関連を指摘するもの[iv]もある。ここでは、ユートピアの生成という本稿のテーマに沿って、このテキストに描かれた天上世界の特徴に焦点を当てて検討を試みたい。

（一）、三つの世界

まず、テキストに描かれた三つの世界を確認しておく。

「天の川の西の岸に、すぎなの胞子ほどの小さな二つの星が見えます、あれはチャンセ童子とポウセ童子といふ双子のお星さまの住んでゐる小さな水精のお宮です」とテキストの冒頭部分にあるように、双子の星たちが住んでいるのは天上世界である。

二人は天上の住民として、毎晩星めぐりの歌に合わせて銀笛を吹く役目

を果たしている。朝になって、天気がよければ、天の泉に行って、「風車で霧をこしらえて、小さな虹を飛ばして」遊ぶことができるほど愉快な日々を送っている。

これに対して、地上世界も登場している。次の語句からその存在が窺える。

① 天の川の西の岸にすぎなの胞子ほどの小さな二つの星が見えます（傍線――筆者注、以下同じ）。

②「……下では小さな鳥なんかもう目をさましてゐる様子です。……」

③ 此の泉は霽れた晩には下からはっきり見えます。

では、地上世界のイメージはどのようなものだろうか。以下の部分に注目したい。

（天の泉の――筆者注）底は青い小さなつぶ石でたひらにうづめられ、石の間から綺麗な水が、ころころころころ湧き出して泉の一方のふちから天の川へ小さな流れになって走って行きます。私共の世界が旱の時、瘠せてしまった夜鷹やほととぎすなどがそれをだまって見上げて、残念そうに咽喉をくびくびさせてゐるのを時々見ることがあるではありませんか。どんな鳥でもとてもあそこまでは行けません。けれども、天の大烏の星や蠍の星や兎の星ならもちろんすぐ行けます。

ここでの「私共の世界」は天上世界の遥かな下にある地上世界であり、しかも、いつも綺麗な泉がある天上世界に比べて、時々旱魃が起こり、生物たちが食料に困り、やせてしまう。そのときは、ただ天上の泉を残念そうに見上げるだけで、途方に暮れている。このように、ここに描かれた地上世界は天上世界に比べて遥かに貧しく、天上世界が地上世界の生き物たちの憧れの対象でありつつも、到底及ばぬ世界であることがわかる。

さらに、右に見てきた二つの世界のほかに、もう一つの世界が登場し、しかも、大きなドラマが展開される。それは、双子の星たちが箒星に騙されて落ちた海底世界である。

「ひとではもとはみんな星さ。……おいらだって空に居た時は第一等の軍人だぜ」と言う海星の話や、「書き付けを持たないのか。悪党め。こゝに居るのはどんな悪いことを天上でして来たやつでも書き付けを持たなかったものはないぞ」という海底の箒星と呼ばれた悪玉の鯨の脅しからも分かるように、海底世界の住民は皆昔天上のものだったが、何らかの罪を犯して、海底に追放されたのである。彼らは落ちてきた双子の星たちをいじめたりして、まだ時々悪い本性を露呈させるが、いつか犯した罪が許され、天上に戻ることを願っているのである。例えば、双子の星が竜巻に乗って天上に戻る前に、「赤い光のひとで」がたくさん送りに出てきて、『さよなら、どうか空の王様によろしく。私どももいつか許されますやうおねがひいたします。』と叫ぶのである。

以上見てきたように、地上のものも、海底のものも、皆天上世界を至福の地としてあこがれ、そこにたどり着くことを願っている。もちろん、地上のものにとっては天上は到底及ばぬ世界であり、夢を見るような気持ちでいるだけだが、昔天上の住民だった海底のものにとっては、天上に戻ることはいつか実現したい夢なのである。実現できるかどうかはとにかく、地上のものにも海底のものにも天上志向があることは確かであろう。双子の星二人も海に落ちたとき、海底での生活を甘受しようとするような発言をするが、それは二度と天上に戻ることがないと判断した上での現実的な

考え方であり、天上志向がないわけではない。それは童子二人が天上に戻れることを聞いて非常に喜ぶことからも確認できる。

他の二つの世界によって、天上世界の存在が強く印象付けられ、他の世界との繋がりも地平に浮上してくる。とくに海底世界から天上世界への上昇が可能だということは、理想世界との距離を心理的により近いものにしているといえよう。

(二)、絶対的権威への信仰

二人の童子が天上の王様に寄せる絶対的信頼は、テキスト中の随所に見られる。具体的な表現をいくつか拾ってみよう。

天の泉で、大烏が蠍の挑発を受け、暴言を発したとき、チャンセ童子が「大烏さん。それはいけないでせう。王様がご存じですよ（傍線――筆者注、以下同じ）」と止めようとした。また、大烏と蠍の戦いの後、二人は大烏の手当てをしてから、「これからこんな事をしてはいけません。王様はみんなご存じですよ」と大烏を戒めた。さらに、二人が怪我をした蠍を背負って家に送ったため、自分の仕事の時間に遅れ、体力的にも倒れる寸前、チャンセ童子は「背中がまがってまるで潰れさうになりながら」、『蠍さん。もう私らは今夜は時間に遅れました。きっと王様に叱られます。事によったら流されるかも知れません』、と、仕事をちゃんと果たさなかったことで、王様に叱られることを気にしている様子だった。

この箇所で、二人の童子はいつも王様のことを口にしている。しかも、彼らの物事に対する是非判断はすべて王様の言行を基準にしている。ここから、王様が彼らの行動基準であり、価値判断の根本を形作っていることが分かる。しかし、彼らの王様への絶対信頼が、逆に箒星にうまく利用され、海底に落ちる羽目になってしまう。もちろん、彼らが箒星に騙されたのは、彼らの王様への絶対信頼に起因するのではなく、福島章が指摘した二人の〈幼さ〉がもたらしたものである。

では、二人が絶対的に信頼した天上の王様とは、どんな存在であろうか。

その王様は一度も双子の星の前に姿を現さなかった。海に落ちた双子の星は、天上の皆にお別れを言うとともに、天上の王様に対しても謝る。その時のセリフは「まだおすがたは見えませんが王様におわびをしませう」だった。また、天上に戻った後、二人は「きちんと（お宮に――筆者注）座って見えない空の王様に申しました」、というくだりもある。これらの箇所から、双子の星が一度も天上の王様に会ってはいないことがないことがわかる。

それに対して、海底の王様は二人の前に姿を現す。「まもなく蒼ぐらい水のあかりの中に大きな白い城の門があってその扉がひとりでに開いて中から沢山の立派な海蛇が出て参りました。そして双子のお星さまだちは海蛇の王様の前に導かれました。王様は白い長い髯の生えた老人（傍線――筆者注）でにこにこわらって云ひました」、という登場ぶりである。

「白い長い髯の生えた老人」として描かれた人間味あふれる海の王様の様子に比べて、天上の王様は姿を現さない分だけ、神秘性があり、威厳を感じさせる。また、海底の王様が「王様はこの私の唯一人の王でございます。遠いむかしから私めの先生でございます。私はあのお方の愚かなしもべでございます」、というくだりから、天上の王様が海底世界をも含め、至上の、絶対的権威をもつ存在であることがわかる。

二人の童子が、この絶対的権威を持つ王様を絶対的に信頼するからこそ、彼らの蠍への献身的な善の行為も実現できたと言えよう。一方、海底に落とされても、積極的な主張をせず、運命を甘受しようとする受身的、他力本願的な行動も、この絶対的信頼に由来するものとも言えよう。ただ、前者はプラスの方向で、後者はマイナスの方向である。

(三)、浄化された心の楽園

次に、この王様が統治する天上世界の特徴を検討してみたい。

この至上の王様によって、海底世界も含め、すべてがきちんと治められている。天上世界は、前述のように、皆のあこがれの楽園なのである。しかし、この楽園には不安定な要素もある。それは傲慢な蠍の星や、乱暴な箒星である。が、これらはいずれも何らかの形で、処置なり、処分なりが下されるのである。

まず、蠍の場合から見てみよう。傲慢さの余り、大鳥と大喧嘩し、命まで危うくなるほどの大怪我をした蠍は、双子の星の無償の行為に感動し、心を改める約束をした。最後には、王様の赦しも得た。そのしるしとして、王様から怪我を治す薬をもらった。その後は語られないが、おとなしく自分の役目をきちんと果たしていることが想像できる。つまり、蠍は双子の星の善意に心を打たれ、正しい道に立ち戻ったのである。

が、箒星の場合は、裁かれる羽目になる。「見るとあの大きな青白い光りのはうきぼしはばらばらにわかれてしまって頭も尾も胴も別々にきちがひのやうな凄い声をあげガリガリ光ってまっ黒な海の中に落ちて行きます。『あいつはなまこになりますよ。』と竜巻がしづかに云ひました」――このように箒星の末路が描かれる。海底の皆も、むかし天上で罪を犯したため、罰として海底に落とされたことは前に述べたが、箒星が裁かれる場面は具体的で、生々しく、かつ鮮明である。

昔は天上にいたが今は海底に居るものも含めて、箒星のような罪を犯したものたちが罰を受けるのは、おそらく、蠍のように改心をしなかったからだろうと推測される。つまり、ここでは、改心するかどうかが一つの大きなカギとなっている。が、別に、もう一つの疑問も出てくる。それは、何故海底に落とすという罰なのか、という問いである。天上で罰を与えることも出来るはずである。この問題を考えるにあたっては、次のことが重要であろう。それは、天上世界という楽園に住むには、ある資格が必要なのだ、ということである。それは善の心をもつことである。ここから、天上世界では内面の性質が重要視されることが窺えよう。

前にも述べたように、蠍は箒星と同じく悪いことをしたが、罰を与えられなかった。それは本人が後に双子の星に感動して、自ら改心したからである。改心した蠍は双子の星と同じく天上に居る資格――善意の持ち主であること――を取得し、天上に居つづけることが出来た。これに対して、悪意によって罪を犯した箒星などは、自ら改心しなかったため、罰を受け、天上から追放され、海底に落とされた。

このように、悪者、しかも改心しない悪者はすべて天上から放逐され、最終的に天上に残ったものはすべて双子の星のような善意の持ち主ばかりになった。このような悪者追放という措置が楽園を維持するためにはどうしても必要だったと見てもかまわないが、天上の楽園を維持するために、客観的にせよ、主観的にせよ、ある〈浄化作用〉が働いていることは確かであろう。海底世界がその〈浄化作用〉の受け皿となっている。ある意味で受け皿としての海底世界があるからこそ、天上の楽園が存在できたと言えよう。従って、もし天上世界を楽園と言うなら、むしろ浄化された楽園と言ったほうが妥当かもしれない。

このような悪者追放や双子の星の善行に対する報いなどは、すべて天上の王様によって命じられたのである。この王様の絶対的権威によって、天上世界の秩序が保たれている。羽鳥徹哉[5]は「『双子の星』の世界は、姿の見えぬ天なる『王さま』を中心としたヒエラルキーの世界」だと主張し、さらに「その階層を分かつ基本的基準は道徳的性格の高下であ」り、そこが「人格主義によって統一された世界」だと指摘している。確かに、天上

も、海底も、それぞれ王様がいて、その王様によって、治められている。しかも、海底の王様は天上の王様の単なるしもべであることから、全体的には海底も天上の王様によって治められていると言ってよい。こうしてみると、確かに序列が保たれていると言える。しかし、氏が指摘する、人格の高下によって、王様以下のものまでが細分化される、という説には、賛成しかねる。確かに、善か悪かという大雑把な区別はあるが、道徳的基準のそれ以上の細分化は天上世界では認めにくい。したがって、階層ごとに秩序が保たれる、いわば多層的な統治と言うよりも、むしろ天上の王様一人によってすべてが治められる、いわば一人の絶対的権威者による直接統治と言ったほうが妥当であろう。それは双子の星に対する報いにせよ、改心した蠍に対する赦しにせよ、すべてが王様の命令によってであることからも分かるだろう。

天上世界の特徴をまとめてみると、以下のようになる。まず、天上世界は他の世界の住民のあこがれの対象である、ということ。そこには絶対的権威をもつ王様が存在している。天上世界をはじめ海底世界まですべてがこの王様の統治の下にある。そこには、善良な幼い双子の星も居れば、傲慢な蠍も居れば、悪者の箒星も居る。双子の星たちは王様に絶対的な信頼を持ち、幼稚でありながらも、善良そのものの振る舞いをする。そのため二回も危機から救われた。傲慢な蠍は闘争心が強く、いざこざを起こしたうえ、双子の星たちにも大変な迷惑をかけたが、双子の星たちの献身的な行為に感動し、改心したため、罰を受けずに済んだ。対照的に、乱暴者の箒星は双子の星たちを騙し、海底にまで落としただけでなく、王様に嘘をつき、心を改める様子が全く見えず、結局海底に追放される罰を受けた。こうして天上に居るものは王様の絶対的な力によって浄化され、善のものしか残されていないことになった。さらに善のものだけによって成り立ったこの世界では、多層的な支配者がなく、一人の、姿の見えぬ天上の王様によって、秩序よく統治されているのである。もちろんそこでは善が最高価値として位置付けられていることは言うまでもない。

留意しておきたいのは、皆があこがれている天上世界が美しく調和的な善の国でありつづけるのは、一人の天上の王様による絶対的支配のもとで常に浄化作用が行われているからだ、ということである。言い換えれば、天上世界は単なる美しい、裕福かつ自由に暮らせるような場所ではなく、絶対的権威者による支配があり、しかもその絶対的支配のもとで信賞必罰の措置がなされる秩序整然とした世界である、ということである。

以上の分析から、賢治文学に表れたユートピアの生成段階の特徴を挙げると、次のような点が指摘できよう。

まずは、心の問題を重視することである。『旅人のはなし』から」に描かれた遠いところにある理想の王国では、心から喜ぶかどうかが幸福の判断基準になっている。「双子の星」に描かれた天上の楽園でも、蠍が心を改める決心をしたため、以前の悪行が許される。ここから、心が善に導かれることが重視されていることが分かる。このように、すべてが心の問題に帰着するような人間性重視の姿勢は、賢治の当時の宗教心（法華経信仰）と深く関わっていると考えられる。

次に、ユートピアの世界が空間的には遥か離れた彼方にありつつも、他の世界の者の憧れの対象であり、心理的な意味では両者は繋がっているという点から、「双子の星」と『旅人のはなし』から」は軌を一にしたものである、ということが言えるだろう。

また、『旅人のはなし』から」には絶対的権威者である王権の存在が匂わされ、そして「双子の星」にいたっては、絶対的権威への信仰が顕著に

なり、統治の仕方も具体的になっている。そこでは、絶対的権威が施した浄化作用が重要な役割を果たしている、と言える。

ちなみに、あるものへの絶対的信頼に由来する他力本願の表現は、後のテキスト「カエロ団長」や「猫の事務所」などにもあることを指摘しておきたい。絶対者への帰依は、ユートピア生成段階に限らず、その後も長く尾を引いており、絶対者の存在が相対化されるまでにはかなりの時間がかかっている。この問題についての検討は別の機会に譲る。

i 「賢治文学の習作期」(『宮沢賢治研究』筑摩書房　昭和四十四（一九六九）年)

ii 幼いときに家から彷徨い出て、長い間放蕩していた貧乏男が、偶然、父とは知らずに父の立派な屋敷の前で再会した。すでに長者になった父の苦心により、男は成長し、最後に自分が長者の息子であることを知り、立派な跡取りになった、という話である。

iii 続橋達雄『宮沢賢治・童話の世界』桜楓社　昭和四十四（一九六九）年

iv 「双子の星」が晩年の集大成テキストと言われている『銀河鉄道の夜』の原型テキストであることについては、諸家の認識がほとんど一致するところである。

v 福島章はテキストの「幼児的色彩が強い」と指摘し、その証拠として、常套的な仕事に対する完全な自己満足感、「王様」に対する完全な信頼感、心の純潔さを挙げた。(「第三部　宮沢賢治の内的世界」『芸術と病理　宮沢賢治』金剛出版社新社、昭和四十五（一九七〇）年)

vi 「双子の星――絶対者希求の構造」(『国文学　解釈と教材の研究』昭和五十七（一九八二）年二月　学燈社）六十四頁

※　本論文で取り上げたテキストの引用はすべて『新校本宮沢賢治全集』(筑摩書房　一九九五）によるもので、ルビは省略した。